

松山城見聞記

神崎辰雄

(会員・鶴見町大島)

私は物心ついた頃から、なぜか城に興味を魅かれてきた。成人して城のある城下町に旅をした時は、必ず城を見学することになっている。城下町のたゞずまいの中に身を置くととき、その町に住む人々の心の拠り所となつている城を素晴らしく思う。

昨年、四国に渡るのは三度目であつたが、松山城をゆつくりと見学する機会を得た。私の城めぐりは歴史を検証するといった学問的なことは別として、往時の雰囲気や味わい、城に溶けこんだ空気の匂いに触れることが好きだからである。残された城址の石垣をなでながら、昔を偲ぶことで満足している。

城がその時代の空気を伝えていくことに加えて素晴らしいと思うのは、自然と人との調和が生まれていくということでもある。山や谷の形状から勾配、川の流れを生かしながら城を築くと、山もただの山であつた時

よりも整ってくるし、城もまた自然と一体となつた威厳を醸し出す美が生まれてくる。

松山城は、かつて「賤ヶ岳の七本槍」で武勇を馳せた加藤嘉明の居城であつた。嘉明は文祿の役の功により、伊予正木(松前)十萬石の城主となつた後、関ヶ原の戦で東軍に味方して活躍し、戦後二十萬石に増されたが正木城が手狭であつたため、慶長七年(一六〇二)に松山城築城に着手している。

松山城は標高一三二メートル、勝山にあり、南北朝時代にも砦が築かれ、要害で松山平野のほぼ中央にある。

慶長八年(一六〇三)嘉明は家臣や正木城下の町人たちとともに、新城下に移り「松山」と名付けた。

しかし、寛永四年(一六二七)完成を目前にして米沢へ転封となつた。嘉明は七本槍の豪勇として知られたが、子の明成が凡庸で家臣の人望が得られず、君臣の争いが幕閣の評定衆を煩わせることになり、不祥事の結果が転封であつた。替わつて入城した蒲生忠知が城を完成させたものの、三〇歳で急死している。次いで同十二年(一六三五)、家康の血縁にあたる松平定行が十五萬石で城主となり、代々継承して明治を迎えている。

天明四年（一七八四）、落雷により、天守、本丸を焼失したが、大飢饉の真ただ中で修復がおくれ、六十八年後の嘉永五年（一八五二）にようやく復興し、現在天守閣は重要文化財となっている。大手門側からは優美な姿を



見せている城も、裏の搦手側から見ると厳しい戦の顔をしていたりする。石垣の稜線を斜めから、また、横から眺めて、曲線の美しさのため息をつき、城が単に他を圧する威嚇のためだけのものではなく、武家の象徴としての美しさ崇高さを感じさせてくれる。ちなみに鶴の翼を上げたような鶴ヶ城、白鷺のような崇高さを感じさせる白鷺城等々、古の人達の技術の高さに感心させられる。

松山は四国八十八か所、四十六番から五十三番札所があり、ミカン（伊予柑）の栽培が盛んである。また、夏目漱石の「坊っちゃん」の舞台としても有名で、正岡子規、高浜虚子、河原碧梧桐など多くの俳人の出身地で、城郭の中に投句箱が設置されているのも、松山ならではである。

先年、高司良恵先生（会員）から格調高い句集「鶴御崎」を頂いたことを思い出した。季節は丁度、ミカンの収穫時、

見はるかす 伊予柑黄ばむ城に侍ち

と一句浮んだが、秀作には程遠いと思いながら松山城を後にした。